

断罪劇をぶち壊したのは、すみっこのメモ魔です

地味令息な僕、気づけば国を救ってた

シスタン・シリウス

シリウス王国の王太子。
傲慢で視野がせまい。

ルーリー・フィバット

フィバット子爵家の令嬢。
エヴァリーンに虐められていると
訴えるが――？

エヴァリーン・フォレスト

フォレスト公爵家の令嬢。
王太子であるシスタンの婚約者で
『氷の令嬢』と呼ばれている。

マクシム・シリウス

シリウス王国の第二王子で、
アトラスの同級生。
アトラスの記録に興味津々。

アトラス・ショウイン

ショウイン侯爵家の三男。
いつも記録用のノートと
万年筆を持ち歩いているメモ魔。
どうやら目が悪いようで――？

Characters

第一章

シヨウイン侯爵家の三男、アトラスの朝はいつも同じだった。

普通、貴族の朝といえば使用人に起こされ、身支度を手伝われ、淹れたての茶を供される。

だがアトラスは違う。学園に入ってから起床も身支度も自分でやると決めた。

理由は単純だ。朝いちばんのこの時間こそが、アトラスにとっては至福だからだ。

毛布の中で、昨夜の続きの本を開く。紙の匂い。指先に伝わる紙の厚み。文字が並んでいるだけで、世界が少しずつ広がっていく。

ページの上に目を落としたまま、彼はゆっくり息をついた。

(……ここは、こう繋がるのか)

枕元の小机からノートを取り上げ、さらさらと書き付ける。

ページをめくる音とペンの音。穏やかな時間が彼の部屋を包んでいる。

外では、家族の朝食が始まったらしい食器の触れ合う音が響き、やがてそれもやむ。

アトラスはそこでベッドから起き出した。制服を着て、寝癖で跳ねた髪を手櫛で整える。結わえも整髪もしない髪は、ところどころぴよこんとしながら自由気ままに主張している。

食堂へ向かうと、家族の食卓はすでに終わり、テーブルは空だった。彼は迷うことなく末席に腰を下ろし、本を脇に置く。

使用人が静かに朝食を並べる。

パン、薄切りのハム、温かいスープ。そして熱い紅茶。

彼はスープを口に運び、ふと手を止めると、ノートを開いて一つ書き足した。

食事中に本やノートを広げるのはマナー違反だと知っている。知っているのだが、どうしても今読みたいし、書いておきたいことはある。忘れてから悔やむくらいなら、いま書く。

食堂の扉の外で、ひそひそ声。

「――あの、あの坊ちゃまは……いつもお一人で召し上がるのですか？」

新人の侍女が、年嵩の侍女長にそつと尋ねる。

「ええ、アトラス様は静かなほうが嬉しいのよ」

侍女長は微笑を含ませて首を傾げる。

「大丈夫。お一人が好きなんじゃないの。あの方は『読んで、書く』ことが好きなだけ」

「はあ……」

そのとき、廊下の奥から声が聞こえてきた。

「おい！ 誰だ、俺の本に触ったのは！」

シヨウイン侯爵家の次男ハイノスの声だ。慌てて侍女長がそちらに向かう。

「ハイノス様、いかがなさいました」

「昨日机に置いた歴史書がない！ 誰かが持ち出したんだろう！」

「……」

アトラスはスープ皿の向こうから顔を上げた。

そしてそのまま、のっそりと立ち上がり、ハイノスの声のする方へと歩いていき、声をかける。

「ハイノス兄上、その本、三日ほど前に修理に出すって仰ってましたよ。製本が割れてたから装丁師に。昨日、御用係が引き取りに来ました」

ハイノスは一瞬きよとし、それから咳払いをして肩をそびやかす。

「……そう、だったな。……ならいい」

踵を返すハイノスの背中が遠ざかる。

侍女長は胸を撫でおろし、新人の侍女と目を合わせる。彼女は小声で囁いた。

「ほらね。あの方は、こういう時にすつと出てきてくださるの。誤解で怒られていたら、『違いますよ』って言うてくださるのよ」

新人は目を丸くし、食堂に戻ってパンを囁りながらノートに何かを書き付けるアトラスをこっそり見た。

彼は誰かのために何かをした、と意識している様子はない。

ただ「事実」を告げただけ。

しかしその事実は確実に誰かを救った。

◇

一人でゆつくりとした朝食を摂って登校する。

昨年度はハイノスも一緒だったが、四年生を修了して卒業したため、現在は一人で通っている。ショウイン侯爵家の三兄弟——といっても今はアトラスのみだが——が通うシリウス王立学園はシリウス王国屈指の名門校で、ほとんどの貴族の子はもちろん、王族も在籍している。四年間の学園生活で、生徒たちは様々な学問はもちろん、社交界というものを学ぶのだ。

学園に着くと、アトラスは「指定席」へ向かう。

教室の一番前、出入り口側の端の席。黒板に最短、先生の声に最短、出入りに最短。窓際の席は出入り口から遠いからあまり好きではない。だから端。

椅子に腰を下ろすと、ペン先が紙の上を軽やかに走る。

授業用ノートと、休憩用ノートは別。

授業用ノートには講師の書き起こして、自分なりに要点をまとめていく。

休憩用ノートには、廊下や中庭で耳にした「気になる話題」を記録する。分類は「人物」「関係」「出来事」など、客観的に分かることのみを記録し、感想は入れない。

彼にとって、書くことは「考える前の準備」だ。

授業中、ふいに教壇から声が飛ぶ。

「では、前列端の君——アトラス君」

アトラスは顔を上げず、下を向いたまま立ち上がる。

「王国史の質問に、簡潔に答えなさい。『大陸統一宣言』が政治的に意味したものは？」

「三点あります。ひとつ、征税権の統合。二つめ、通商路の関税再編による流通の一本化。三つめ、軍勢動員と補給線の一元化です。副次的に反乱の抑止効果が生まれました」

「……正解」

アトラスはぺこりと軽く頭を下げて、すっと腰を下ろす。前を向かない。黒板の文字は彼にとって意味がなく、声を追ったほうが正確だからだ。

そんな彼を後ろからじつと見ている生徒が一人いた。

アトラスは、その視線に気づくことはなかったが。

◇

昼休み。

アトラスは鞆に筆記用具やノートを押し込み、屋上へ向かった。

食堂は賑やかで、人が多すぎる。人が多いところに行くと必ず人にぶつかる。

だが屋上は違う。ひとけがない。風がある。

そして、興味深い音が登ってくる。

腰を下ろし、パンをひとかじり。鞆から赤いリンゴを取り出して齧^{かじ}る。ぱり、と薄皮がはじけ、酸味と甘みが舌に広がる。頬に風。屋上の石床のひんやり。

(……よし)

彼は「休憩用ノート」を開いた。

耳を澄ます。壁を伝って、階段の吹き抜けを通して、校庭の端から、あちこちの「声」が集まってくる。すべてを拾うわけではない。拾おうと頑張るわけでもない。向こうから届いたものだけを、淡々と、事実だけを、書く。

「――婚約破棄」

「――ルーリー」

「――殿下」

「――エヴァリーン」

「――創立記念パーティ」

最近、やけに同じ言葉を耳にすることが増えていた。

アトラスは眉をわずかに寄せ、時刻と場所を付す。

誰かの笑い、誰かのため息、誰かの興奮。音の温度。風向き。遠くの鐘の回数。

「ねえ、聞いた？ 創立記念、殿下が――」

「ルーリー嬢、一年生なのに出席するのは――」

「エヴァリーン様は？ エスコートは――」

「三、四年生だけが――」

聞こえてくる言葉をそのまま書き付ける。日時も忘れず記す。

風がぱらりとページをめくりかけ、アトラスは指で押さえる。

パンをもう一口。リンゴをもう一齧り。遠くで、誰かが笑いすぎて咳き込んでいる音。近くで、男女二人の囁く音。すべて耳が拾ったものを書いていく。

(……なるほど)

彼はペン先を止め、リンゴの芯を紙に包んだ。風が少し冷たくなる。鐘が鳴る。午後の授業が始まる合図だ。ノートを閉じる時、アトラスは小さく独り言を漏らした。

「……念のために、行ってみるか……」

彼は鞆を肩にかけ、屋上から校舎へ戻っていった。

――このとき決めた小さな一歩が、やがて大きな劇をひっくり返す最初の一行になることを、アトラス本人はまだ知らない。

◇

アトラスはいつもと同じ制服に袖を通し、大きな鞆を肩にかけた。髪は相変わらず寝癖で跳ね、後ろにぴよこんと飛び出した毛が勝手気ままに主張している。本人は気にしていない。

彼にとってもっとも大事なのは、今日持っていく手筈の一冊のノートだった。

もう一度ぱらりとノートの中身を確認し、大きな鞆の中に丁寧にしまう。準備を終えて部屋を出ると、玄関にはすでに馬車が待っていた。

そこでハイノスと鉢合わせる。

「アトラス、どこへ行くつもりだ？ 今日創立記念日だぞ」

「はい。創立記念パーティーに行こうと思います」

「な、なんだと!? その格好でか？」

「はい、では行つてきます」

「おい、待て！ おいおいおい！」

制止の声も意に介さず、アトラスは馬車に乗り込んだ。扉が閉まると同時に御者が手綱を引き、馬車は石畳をゆつくりと進み出す。

呆然と見送るハイノスの横に、シヨウイン侯爵家の長男ガイアスが姿を現した。

「どうした？ そんなに慌てて」

「兄上！ アトラスが……あいつ、制服のままで創立記念のパーティーへ！」

「は？ 制服で？」

ガイアスは目を瞬き、それから腹を抱えて笑った。

「ぶつ……あいつ、やるなあ！ でもまあ、アトラスらしいじゃないか」

「やるなあ、じゃありません！ 常識外れにもほどがあります！」

「いいんだよ、あいつは『普通』なんか求められてないんだから。どうせ何を言われても、本人は

気にもしないだろう」

「……兄上はお気楽すぎます！」

「大丈夫、大丈夫！」

ガイアスは笑いながらハイノスの肩を軽く叩き、洪面を浮かべる彼を残して歩き去った。残されたハイノスは額を押さえ、胃の奥がきりきりと痛むようなため息をついた。

◇

馬車の中で、アトラスは膝の上に置いた大きな鞆を開き、ノートを眺めていた。窓の外の喧噪など耳に入らない。記された文字こそが彼にとつての確かな世界だった。

やがて馬車は学園に到着し、創立記念のパーティー会場となる広間の入り口、石段の前で止まった。アトラスは鞆を抱え直し、会場へと歩を進める。

扉が開かれると、眩しい光とざわめきが雪崩れ込んだ。

華やかな広間の入り口に制服姿のアトラスが立つと、その場違いな姿に周囲の視線が一斉に集まる。

「ねえ、あれ誰？」

「襟章を見るに二年生ね」

「創立記念は任意の参加ですものねえ……でもあの格好は……」



囁き合う声が、波紋のように広がっていく。だが当の本人には届いていなかった。
アトラスは眉をひそめ、ぼつりと独り言を洩らす。

「……明るい。うるさい。臭い」

鞆を抱え直し、アトラスは迷わず会場の隅へと歩いていく。

広間の中央など彼には到底居場所とは思えない。選んだのは、入口近くの大きな柱の影。そこから全体を観察できるし、人に押されることもない。

そこに立つと、鞆からノートを取り出し、淡々と開く。

立っているだけではあるが、手は紙の上を忙しなく行き来していた。

(……さて。「何か」が起こるなら、ここから全部聞こえるはずだ)

ざわめきの海の片隅で、一人だけ異質な時を生きる少年^{アトラス}。

彼はペンを走らせ、聞こえてきた言葉を一つひとつ記録していった。

やがて、会場の中央に立った第一王子シスタンの声が、騒めきを断ち切る。

「——この場をもって、私とエヴァリオン・フォレストとの婚約を破棄する！」

大広間は爆ぜるようなどよめきに包まれた。

歓声、悲鳴、憐憫^{れんぴん}の吐息。無数の声が一斉に天井を揺らす。

「……やっぱり」

アトラスが小さく洩らした声は、喧噪にかき消されて誰にも届かない。

だがノートの上では、彼の予測が揺るぎない「事実」として刻まれていた。

——断罪劇は、いま始まったのだ。

大広間に緊張が走っていた。

シスタンの腕に体を寄せる令嬢——ルーリーが自身の身に起きた様々な悲劇を訴え、エヴァリーンを糾弾する声が次々と飛び交い、シスタンの宣告が重苦しく空気を縛っている。

誰もが次の展開を、固唾を呑んで見守っていた、その時——

「……あのお、よろしいでしょうか」

場違いなほど間延びした声が、ざわめきの渦にぼとりと落ちた。

一瞬、誰の声か分からず、人々はきよろきよと周囲を見渡す。

次の瞬間。

人だかりの後ろから、ノートだけがひよいと突き出され、ぶんぶんと振られた。煌びやかなドレスや礼服に彩られた華やかな空間に、突如として現れたその素朴な一冊は、あまりにも異質だった。

「それ……僕の記録と、違うんですがあ」

ざわめきが、波紋のように広がっていく。

三、四年生の背中越しに、制服姿の少年——アトラスがひょっこりと現れたのだ。

まだ背の伸びきらない体格は、ドレスアップした上級生たちに囲まれると余計に小さく見える。

寝癖の残る髪、大きすぎる鞆、そして手にしたノート——彼だけが、この煌びやかな場にそぐわない“学園の日常”を纏っていた。その場違いさに、かえって視線が集中する。

アトラスといえば、平然とノートをばらばらと繰り、ある箇所では指を止めると、ただ事実を告

げるように口を開いた。

「……はい、やっぱり違います」

「違う？」

誰かが思わず声を漏らした。

アトラスは小さく頷き、ノートを胸の高さまで持ち直し、口を開いた。

「はい。えっと……先ほど、ルーリー嬢が役者のように殿下に訴えていた『香水の件』ですが——」
アトラスの声には抑揚がない。ただ、そこに書かれた文字を淡々と読み上げるだけの、無垢な調子だった。

広間の片隅で「ぷつ」と吹き出す誰かの声が混じった。緊張で張り詰めていた空気に、突然差し込んだ“日常”の匂い。

シスタンの宣告が巻き起こした熱狂が、静かに落ち着いていく。

だが、アトラス本人は気づきもしない。

彼はページを開き、角に折り目をつけていた箇所親指を置いた。

「九月三日、午後三時半頃。中庭。ガラスのようなものが割れる音。その後、女性の泣き声。『どうしたの、ルーリー嬢』と複数の声。ルーリー嬢が泣きながら訴える。内容は——『フォレスト公爵令嬢に突き飛ばされ、香水をかけられた』と。しかし……前段の採め事の声は一切聞こえておりません」

静まり返る広間。

アトラスは紙から顔を上げることなく、ただ言葉を紡ぐ。

「その後、ルーリー嬢の声と思われるもの。『みんな簡単なんだから』。笑い声。以上」

「……っ！」

ルーリーの頬が引きつった。

「っ、つくられた記録だ！ そんなもの、信じられるか！」

シスタンが声を荒げた。

アトラスはぱらりと次のページをめくる。

まるで相手の怒声など聞こえていないかのように。

「十月八日、午前十一時頃。講堂裏。何かを打ちつけて、固いものが壊れる音。女性の声で『よし！』と。その直後、足が水をかき分ける音。そして悲鳴。周囲の生徒たちが駆けつけ、シスタン殿下の声。『ルーリー、かわいそうに』と。悲鳴と、女性の声は同じ質であった」

アトラスはようやく顔を上げ、広間を一瞥する。その瞳に迷いはなかった。

「つまり——ここから読み取れるのは、ルーリー嬢が自分から水に入った、ということです」

「なっ……！」

ルーリーの叫びが裏返る。興奮のあまり、口走った。

「なに勝手に盗み聞きしてるのよっ！ そ、そんなに聞こえるはずないじゃない！」

その瞬間、広間の空気が凍りついた。

彼女自身の口から漏れた失言が、否応なく真実を裏打ちしてしまったのだ。

アトラスは、ただ小首をかしげただけだった。

「いや、あの、婚約破棄って、大事ですよね？ 誤認があると、よくないと思ったので」

素朴な話し方。だが真実を突いたその一言で、広間を覆う空気は確実に変わっていった。

人々の視線はシスタンから逸れ、ノートを持つアトラスと沈黙を貫くエヴァリーンの間を往復し始める。

「黙れ！」

シスタンが声を荒げた。顔は赤く、声は裏返っている。

「貴様は誰の差し金だ！ こんな子供の戯言で、私の言葉が揺らぐとも思おうか！」

アトラスは一步も引かない。

ただ、いつものようにノートを抱え、きょとんと首を傾げる。

「差し金……？ いえ、僕はただの二年生です」

一瞬の静寂。そしてざわ……と広間が揺れる。

「二年生？」「あんな子、いたか？」とひそひそ声が飛び交った。

「聞こえたことを、そのまま書いているだけです。僕、耳だけはいいので」

シスタンの怒声とアトラスの平坦な声。その温度差は、場の空気をさらにねじ曲げていった。学園長が痺れを切らしたように咳払いをした。

「殿下。ここは一度、事実確認を……」

「しかし——！」

シスタンが反論しかけた、その時だった。

「殿下」

低く、澄んだ声が響いた。それは初めて広間に落ちた、エヴァリーンの声だった。

その場の空気が、一瞬で変わる。

張り詰めていた糸がすっと一本引かれ、皆の耳が自然に彼女へと傾いた。

エヴァリーンはシスタンを見ない。その視線は、アトラスのほうへと注がれていた。

「あなたが示された記録を——お借りさせてください」

言葉は静かだが、確信に満ちていた。

「後ほど、しかるべき場へ提出し、精査していただきます。そのための写しを作らせていただきますら、原本はお返しします」

広間がざわめいた。

その穏やかな一言で、さきほどまでの茶番めいた証言と断罪劇が、一気に色褪せていく。

シスタンは言葉を失い、ルーリーは真つ青になって肩を震わせた。

「あ、はい」

アトラスはこくりと頷き、両腕で抱えたノートを差し出す。

——が、彼が向けた手は、エヴァリーンではなく、その隣に控えていた侍女の方へ。

「……こちらではなくてよ」

侍女が小声で囁く。

「あ、す、すみません」

間の抜けたやりとりに、小さな笑いが広間のあちこちで波紋のように弾けた。
すぐに消えたが、場の空気は確かに和らいでいた。

エヴァリーンは表情を動かさぬまま、静かにノートを受け取る。

アトラスはぺこりと頭を下げた。

「えっと……お騒がせしてすみません。役に立つかと思って。——では、失礼します」

大きな鞆を抱え直すと、彼は何事もなかったかのように出口へと歩いていった。人々は自然と道をあけ、ただその小さな背を見送る。

——彼はいったい誰なのか。

そんな疑問だけが広間に残された。

静寂を断ち切ったのは、エヴァリーンだった。

「学園長、そして皆さま」

彼女はゆるやかに微笑んだ。

「式は続けましょう。——今日は、我がシリウス学園の創立を祝う日ですもの」

その一言で、波立っていた空気は音もなく鎮まり、断罪の場は再び祝祭の場へと戻っていった。
最高潮で幕を下ろすはずだった茶番は、壁際から現れた少年の一声によって、あっけなく崩れ去っていたのだ。

翌朝。

いつも通り、寝ぼけ眼で分厚い本を開き、誰に咎められるでもなく静かに過ごす——それがアトラスの日常だった。期待もされず、叱責もされず、ただ「勉強でもしておけ」と言われて生きてきた彼の朝は、いつも同じ。

だが、その日は違った。

「アトラーズ——！」

扉を叩き割らんばかりの声とともに、ハイノスが怒鳴り込んできた。

ベッドの上で本を読んでいたアトラスは、ページをめくる手を止め、ぽかんと顔を上げる。

「……お久しぶりです、兄上。えっと……ハイノス兄上、ですよね？」

「当たり前だ！」

顔を真っ赤にしたハイノスは、畳みかけるように叫んだ。

「それよりお前、今フォレスト公爵家からお迎えが来ている！ アトラスを出せ」と直々におっしゃっているんだ！」

「え？ 何のご用事でしよう？」

「私が知るはずがないだろう！ 一体何をしでかしたんだ、お前は！」

「え……いえ、その……特に何も……していないと、思うんですけど……」

「もういい！ さっさと支度をして奥の間まで来い！」

ハイノスは吐き捨てるように言い、扉を勢いよく閉めて去っていった。

その足音が廊下を遠ざかっていく。

けれど、ぶつぶつとこぼす声はアトラスの耳にはまだ聞こえていた。

「ああ、こんな日に限って兄上は家にいないし……いや、いたところで面白がるだけだ。役には立たん！ 今まで兄上だけが胃痛の元だったのに……アトラスまでも……！ くそっ、この調子でいけば胃の次は髪まで犠牲に……いや、髪だけは死守してみせる！」

やがて声も聞こえなくなった。アトラスはしばらく閉じた扉を見つめた。

(……髪？)

しばらく考えたものの、よく分からない。

アトラスはぼさぼさの頭をかいた。

「ああ……面倒だ。休みの日に、なんだろう……」

ぶつぶつ呟きながら、ようやくノロノロと支度を始めたのだ。

奥の間に向かうと、フォレスト公爵家の紋章もんしやうを胸に刻んだ老執事が静かに一礼した。

「お待ちしておりました、シウウィン侯爵家三男アトラス様。ご同行を願えますでしょうか」

「え、あ、はい……」

執事の後ろについて屋敷を出ると、黒塗りの馬車が待っていた。

扉が開かれ、アトラスは鞆を抱え直し、段差を確かめたつもりで足を掛け――

「わっ……！」

踏み外しかけた体を、執事の手がすつと支える。

「……す、すみません。ありがとうございます」

頬を赤くして頭を下げ、馬車に腰を下ろす。膝の上で鞆を抱えながら小さく呟いた。

「……なんで僕は、いつもこういうところで失敗しちゃうんだろうなあ」

◇

馬車は石畳を静かに進み、やがてフォレスト公爵家の壮麗な門をくぐっていった。

フォレスト公爵家の重厚な扉が開かれ、吹き抜けの玄関ホールが広がった。大理石の床、左右に伸びる大階段、燭台の光が壁の絵画を照らす。

その中心に――エヴァアリンがいた。深緑のドレスに身を包み、背筋を伸ばして立つ姿。

アトラスの目には輪郭がぼやけて細部まではわからない。

けれど、不思議と「光の中に立つ女神様」のように見えた。

「ようこそいらしてくださいました。……あのときのノートの持ち主、シウウィン侯爵家のアトラス様ですね」

澄んだ声に、アトラスは慌てて頭を下げる。

「は、はい。僕、アトラスと申します」

自己紹介もそこに、アトラスはエヴァアリンの案内で客間に通された。深いソファ、香り高い茶器。慣れない空気に、アトラスは鞆を膝に抱えたまま小さく身を縮める。

そのとき――

「おお、こいつが例の三男坊か！」

ドカドカと大股で入ってきたのは、高位貴族らしい威厳と大胆さを感じされる男性――オズワルド・フォレスト公爵本人だった。

従者も侍女も慌てて頭を下げる中、フォレスト公爵は構わずアトラスの前に、どかりと座る。

「よくやったな、小僧！ あの本クラ王子の茶番をぶち壊してくれたとは！ ふん、あんな阿呆と縁が切れたのは我が家にとって幸運だ。エヴァアリンもせいせいしただろう？」

アトラスは思わず鞆を抱きしめ直し、目を瞬かせる。いったい何が起きているのか。

「え、えっと……その……」

横でエヴァアリンが小さくため息をつき、口元に微笑を浮かべた。

「お父様、けれどセドリックが『わたくしを子爵家へ移す』などと口走っておりましてわ」

「はっ！」

フォレスト公爵は鼻で笑う。

「そんなもの、認めるはずがないだろう！ 跡継ぎも家の行く末も、すべて私が決める。出来の悪い弟の戯言など、聞くだけ無駄だ！」

「お父様……もう少しお言葉をお選びになったほうがよろしいかと」
「なんだ、事実だろうが！」

フォレスト公爵はますます声を張り上げる——が、すぐにふっと立ち上がった。

「さて、私はこれから王宮での会合だ。長居はできません。だが礼だけは言わせてもらおう。アトラス、よくやった。お前のおかげで我が家は救われた」

大股に歩きかけ、振り返る。

「ああ、そうだ。今日は泊まっていけ。夕食も一緒にとろうではないか！」

「え、えっと……僕なんかが……」

「決まりだ！」

手をひらひらと振って、フォレスト公爵はあつという間に去っていった。

重い扉が閉まり、エヴァリーンが小さく笑う。

「ふふ……お父様はいつもあんな感じなのです。お気になさらず」

「は、はい……」

「それと——改めて。あのときのノート、ありがとう。あなたが差し出してくれなければ、わたしは理不尽を受け入れさせられていたかもしれません」

「い、いえ。僕はただ、書いていただけで……」

エヴァリーンは侍女に目で合図を送った。奥の扉が開き、背筋の伸びた壮年の男と、革の道具箱を抱えた従者が姿を見せる。

「紹介しますわ。王都でも評判の眼鏡矯正師です。——あなた、遠くのものがよく見えていないのでしょうか？」

アトラスは目を丸くする。

「えっ……な、なぜ」

「わたくしにノートを渡そうとして侍女に差し出したでしょう。……あの瞬間に気づきましたの」

矯正師が恭しく会釈した。

「では、少々拝見いたします」

「さて、窓の外、遠くをご覧ください」

矯正師に促されるまま、アトラスは窓の外へ視線を向けた。

朝の日差しを浴びて、王都の石造りの街並みが広がっている。

「……あの、白いの、なんでしょう。鳥、ですか？」

矯正師は目を瞬かせた。

「白いの、とは？ あれは鐘楼の時計でございます」

「えっ……！ あれ、時計ですか」

矯正師は頷き、手際よくレンズを入れ替えながら言葉が続ける。

「やはり強い近視でいらっしゃる。遠くは霞んで見えるはずですね」

アトラスは照れながら頬を掻いた。そうか、自分は目が悪かったのか。

「……やっぱり、ずっとおかしいなとは思ってたんです。黒板の字がぜんぜん読めなくて、いつも



耳で覚えてましたから」

矯正師は苦笑し、レンズを調整する。

「それを、おかしいな」で済ませてしまわれるとは」

やがて矯正師は満足げに頷いた。

「ちょうど良い度数が出ました。今から急ぎで作らせましょう。明朝には仕上がります。本日は仮の眼鏡をお貸しします」

その言葉を受けて、エヴァリーンが微笑んだ。

「ですので、今日は我が家でゆっくりとなさってください。ショウイン家にはこちらから使いを出しておきますわ」

アトラスはおそろおそろ仮の眼鏡を受け取り、耳に掛けた。

その瞬間——世界が、初めて見えた。

鐘楼の文字が一つひとつ見える。

庭に咲く花が色ごとに揺れ、葉の一枚一枚が光を受けて煌めいている。

そして、正面に立つエヴァリーンを見た。

今まで霞^{かす}んでいた輪郭が、鮮やかに結ばれる。端正な横顔、透き通る瞳、凛とした佇まい——

「……美しい」

思わずこぼれた言葉に、自分で気づいて耳まで真っ赤になった。

「あ、いえっ！ 景色が……景色が美しいっていう意味で……！」

「ふふ。ありがとうございます」

エヴァリーンは柔らかな笑みを浮かべ、そっと問いかけた。

「よろしければ、このあと——我が家の図書館をご覧ください？」

「えっ、いいんですか」

アトラスは仮の眼鏡のつるを直しながら、こくりと頷いた。

フォレスト家の図書館。

高い天井まで届く書架がずらりと並び、革装の背表紙や金の箔押しが整然と並ぶ。足を踏み入れた瞬間、アトラスの瞳は子供のように輝いた。

「……ああ、すごい。本当に、なんでも見える……！」

そして、アトラスはある本を見つけて思わず息をのんだ。

「あんなところに——ロッソ語の原典があります！」

「あなた、ロッソ語が読めるの？」

エヴァリーンが驚いたように問いかけてくる。

「辞典を片手に少しづつ……気づいたら、あまり難しいものなら」

アトラスは照れ笑いを浮かべ、さらに視線を走らせる。

「その隣はビアンコ語の詩篇集。……こちらはネロ語の年代記ですよ」

「正解ですわ」

エヴァリーンは愉快そうに微笑んだ。アトラスは書架を見上げ、思わず背伸びをした。

「うわ……あんな上の段、初めてはつきり見えました。あれは……『大陸古代植物誌』！」

気づけば梯子に足をかけていた。これまで目が悪く、怖くて登れなかった梯子。

だが今日は違った。視界に映る段差を確かめながら、慎重に登っていく。

指先で触れた背表紙をそっと引き抜き、抱きかかえる。

「取れた……！」

小さく呟き、胸に抱いたその瞬間、アトラスの世界がひとつ広がった気がした。

机に本を広げたアトラスは、夢中になってページを繰り始めた。眼鏡越しに映る細やかな文字や挿絵が、鮮やかに彼の頭の中に飛び込んでくる。

やがてエヴァリーンの存在をすっかり忘れ、ただ本と向き合っていた。

その間に、彼女は使用人にお茶を命じ、向かいのソファに腰を下ろして静かに本を開いていた。しばらくしてふと顔を上げたアトラスは、対面でページを繰るエヴァリーンの姿を見て息をのむ。光に照らされた横顔は神々しいほど美しく、静けさの中にただ一人、凛として存在していた。

気づかれまいと慌てて視線を逸らす——だが、遅かった。

「……何か？」

顔を上げたエヴァリーンが、微笑みを浮かべて問いかける。

アトラスは真っ赤になり、手にしていた本を持ち上げて顔を隠した。

「い、いえっ！ なんでもありません！」

その仕草に、エヴァリーンはくすりと笑い、再びページへ目を落とす。アトラスも、胸の鼓動を抑えながら本へ意識を戻した。

——そしてまた、二人の間に静かな時間が戻った。

ページをめくる音だけが響き、静かな空気の中で、アトラスは自分の世界がどんどん広がっていくの確かに感じていた。視界が開けたその瞬間から、彼の世界は静かに新しい輪郭を描き始めた。



夕刻、公爵家の長卓。

銀器が灯りを返し、静かな弦の音が流れる。

上座にはフォレスト公爵と夫人マリアンヌ、その隣にエヴァリーン。アトラスは対面に座り、仮の眼鏡を指でそつと直した。末席には先ほど名前が出たエヴァリーンの弟、セドリックの姿もある。

フォレスト公爵夫人がアトラスの傍らに置かれた本へ目をやり、穏やかに微笑んで声色を変えた。

「先ほどは図書館をご案内したけれど、その原典に目が留まったのね？」

アトラスはビアンコ語で自然に返す。

「はい。書影から十五世紀の版かと。脚注の綴りが古式でした」

フォレスト公爵のフォークが止まる。

エヴァリーンが涼しい横顔のまま、さらりとロッソ語に切り替えた。

「その脚注、少し読んでいただけける？」

「はい、分かりました」

アトラスは本を手に取り、短く朗読する。柔らかな発音、控えめな抑揚。

「……以上です」

フォレスト公爵の口角が上がる。

「ならば——ネロ語も分かるか？」

「辞書を片手に、ですが。日常会話程度なら」

「……なんだ今の、何語だ？」

セドリックが小声で侍従に訊ね、侍従は困って目を逸らす。

エヴァリーンはグラスを置き、アトラスを見つめた。

「あなた、本当に『耳』がいいのね」

「はい。よく聞いて朗読して覚えるのが、僕には一番です。学園の勉強も、黒板が見えなかったの
で、ずっと耳と家の本頼みで……。でも、耳だけはよかったので、時々、港に行っては色々な言葉
を聞いて覚えていました」

フォレスト公爵夫人は目を細めて頷き、フォレスト公爵は「ほう」と短く笑った。

「面白い子だ」

卓に再び音楽が戻る。アトラスは仮の眼鏡越しに、燭台の炎がくつきりと揺れるのを見た。

世界の輪郭が、ひと線ずつ定まっていく。

この日の父——フォレスト公爵はいつも以上に饒舌^{じようぜつ}だったと、後にエヴァリーンはアトラスに語った。実際、フォレスト公爵はアトラスに沢山の出来事を語り聞かせ、アトラスはそれを聞いた。「今日の王宮は傑作^{けっさく}だったぞ」

ワイングラスを揺らしながら、我が国の国王陛下——ガストンとのやり取りを面白おかしく再現する。

『まさか、シスタンがここまで愚かだったとは』

『今さらか！ 俺など十の頃には見切っておったわ！』

卓に笑いが広がる。

「社交界でも王宮でも、あの一派は笑い者だ。ルーリー嬢も、側近のバルドも、誰一人まともに相手にされておらん。親たちは皆、頭を抱えているそうだ」

「身から出た錆^{さび}ですわね」

フォレスト公爵夫人が静かに頷いた。

フォレスト公爵はふとセドリックへ目を向ける。

「……もつとも、他人事ではない。我が家にも学園しか見えていない者がいるようだがな」

アトラスは視線を落とし、仮の眼鏡越しに炎の揺らぎを見つめた。

フォレスト公爵から発せられる言葉の一つひとつが、人の立場を揺らし、家の未来さえ左右していく。

——これは、本で読んだ歴史や政争の記述ではない。

今、目の前で語られ、笑われ、嘆かれている出来事だ。

その一言で、人の評価も家の命運も変わっていく。世の中は、こうして動いていくのか。胸の奥で小さな驚きと興奮が交じり合い、アトラスはその場に立ち会っている自分を強く意識した。

ただの傍観者^{ぼうくわんしや}であつたはずの自分が、“この国の動き”を目撃している。その感覚は、これまでにない確かな実感となつて、アトラスの心に刻みつけられていた。

そんな夕餉^{ゆぐ}の卓に広がる静かな旋律を、唐突に打ち破つたのはセドリックだった。

顔を真っ赤にし、身を乗り出す。

「し、しかし！ 姉上は“氷の令嬢”と呼ばれて恐れられているんですよ！ 王太子の婚約者ともあろう者の評判ではないでしょう！」

思わぬ叫びに、卓の空気が一瞬揺らぐ。

フォレスト公爵夫人は静かにフォークを置き、涼やかな眼差しを向けた。

「その評判、どこの評判かしら？ ……まさか学園だけではないでしょうね。社交界ではどう見られているか、考えたことはあつて？」

氷のような声色に、セドリックは息を呑む。

フォレスト公爵は鼻で笑い、グラスを乱暴に置いた。

「そもそも“氷”のどこが悪いんだ？ 濁^{にご}らず澄んで、美しく輝く。火を近づければ儼く消える——だからこそ尊ばれるんだ」

その言葉を聞いたアトラスが、はっとしたように声を上げた。

「ああっ！なるほど……！あれはエヴァアリン様のことだったんですね。同じクラスの子生徒がよく話してました。『透き通った氷のように清く輝くご令嬢』憧れの方。って。やっぱり、エヴァアリン様のことだったんだ……」

不意の言葉に、エヴァアリンの瞳が一瞬揺れる。そして、ごくわずかに笑みが浮かんだ。やがて彼女は、侍女からアトラスのノートを受け取り、静かにページを繰る。ばらり、ばらり。

指先がある一か所で止まる。

「……ご覧になって？　ここ、七月四日。図書館裏」

風いだ水面に石を落とすような声。読み上げられた文字が場を支配した。

「——図書館内で勉強をしていると、外から囁き声が聞こえる。『姉上を追いやったら、ルーリーが殿下と婚約できます。それに私にとっても邪魔なんですよ、あの人。鬱陶しいんです』『嬉しい！じゃあ、セドリックさまがどこかにやつてくれるの？』『任せてくれ！』」

エヴァアリンは視線を弟に向け、ノートを差し出した。

「——ほら。あなたの言葉が、こうして残っておりますわ」

紙の端には、日付も時刻も場所も細かく記されていた。几帳面な筆致。遊びや虚構の入り込む余地は一切ない。

セドリックは蒼白になり、口を開けたり閉じたりするばかりだった。

そんな息子をチラリと見て、フォレスト公爵は長く息を吐き、天を仰ぎながら深々と椅子にもた

れた。

「同じように育てたはずなのにな。なぜ、こうも違ってしまったのか」

フォレスト公爵夫人が静かに言葉を添える。

「やはり学園での思い上がりでしょう。学園こそ全てだと信じ込んで……けれど社交界では、すでに笑い者になっていることを理解しておいたほうが良いですわよ」

「しかし……！」

セドリックはなおも何かを言い募ろうとした。

フォレスト公爵はゆっくりと息子へ視線を向ける。

「……………」

言葉はない。だが、その眼差しだけで十分だった。

セドリックの喉がひくりと鳴り、握り締めた拳が震える。

「……っ、くそっ！」

吐き捨てるように呟くと、そのまま踵を返した。重い扉が勢いよく開かれ、晚餐室を飛び出していく。ボタン——と鈍い音を立てて扉が閉まり、しばし静寂が流れる。

フォレスト公爵は小さく息をつき、ワイングラスを卓へ置いた。

「……さて。」

先ほどまでの豪放な笑みは消え、公爵としての鋭い眼差しがアトラスへ向けられた。

「アトラス」

突然名を呼ばれ、アトラスは背筋を伸ばした。

「君に、一つ依頼したいことがある」

「ぼ、僕にですか？」

フォレスト公爵は静かに頷いた。

「今回の件は、君のおかげで茶番として終わった。エヴァリーンの名誉も守られた。まずは礼を言おう」

アトラスは慌てて首を振る。

「い、いえ。僕は、事実を書き留めていただけですから……」

「だからこそだ」

フォレスト公爵は力強く言った。

「君は事実を書き残した。そして、その事実が我が家を救った」

一拍置き、フォレスト公爵は静かに続ける。

「……だが私は、あのボンクラ王子に娘を嫁がせるつもりは、もうない。それ故こちらに非がない形で婚約を解消したい。そのためには、真実を積み重ね、誰の目にも動かぬ証拠を揃えなければならん」

アトラスは首を傾げた。

「僕に……何ができるのでしょうか」

フォレスト公爵はテーブルに置かれたノートへ視線を落とした。

「君から借りたノートを読ませてもらったよ。そこには、エヴァリーンの周囲で起きた出来事が、時系列に沿って克明に記されていた。読み進めるうちに、私は一つ気付いたのだ」

フォレスト公爵は静かにページを閉じる。

「サリーナ・ユージュラス」

彼がつぶやいた一人の令嬢の名に、エヴァリーンが小さく頷く。

「わたくしの親友です。彼女は、ありもしない噂を流されたのち、その噂が恣意的に婚約者へ伝えられたことで婚約が破談となり、領地へ戻ることになったのです。しかしそのあと、彼女とは連絡が取れず……。何かあったのではと心配していたところでした」

フォレスト公爵はノートを軽く叩いた。

「このノートにも、その頃の記録は残っている。だが、残されていたのは事件の終盤だけだった。噂がどこから始まり、誰が流し、どう広がったのか。その肝心な部分は、このノートには残っていない」

アトラスは小さく首を傾げる。

「……それより前のノートですか？」

「ああ。君がこれまで書き残してきた記録を最初から見せてもらえれば、より明確に分かるはずだ。ルーリーは、エヴァリーンを孤立させるため、彼女の周囲にいた人々を一人、また一人と遠ざけていった。サリーナ嬢は、その最初の犠牲者だったのだろう。そしてサリーナ嬢の件から創立記念パーティまで、すべては一本の線で繋がっていると私は考えている」

アトラスは黙って耳を傾けている。

「私は、君の記録こそが、こちらに非のない形でエヴァリーンの婚約を解消するための、誰の目にも動かぬ証拠となると考えている。しかしそのためには、君の記録の正当性を証明しなければならぬ。そこで、君の記録を使って、サリーナ嬢を襲った悪意の出どころがルーリーだと明らかにし、彼女の名誉を回復してもらえないだろうか。サリーナ嬢は、娘の友人だったからこそ陥れられたのだ。できることならば助けてやりたい」

しばらく考えたあと、アトラスは小さく頷いた。

「わかりました。……ですが、ここまで大きな依頼は、僕一人ではお受けするとは申せません。父に相談してから、お返事いたします」

「それで構わん」

フォレスト公爵も静かに頷く。

「正式な依頼だ。ショウイン侯爵家として受けるかどうか、ご判断いただこう。それにエヴァリーンが言ったように、サリーナ嬢は領地に籠りっぱなしで、手紙のやり取りも途絶えている状況だ。話を聞くには直接ユークラス伯爵領に向かうしかない。外泊するとするとショウイン侯に話を通す必要があるだろうからな」

「はい」

フォレスト公爵はふつと表情を和らげ、パンと手を叩いた。

「よし。この話、今夜は終わりだ。難しい話ばかりでは疲れるだろう。明日の朝には眼鏡も仕上

る。それを受け取ってから帰ればいい。それと、図書館の本も好きなだけ借りていけ」

アトラスは目を丸くした。

「……いいんですか？」

「もちろんだ。後でゆっくり選んでいけ」

フォレスト公爵は豪快に笑う。

「ありがとうございます！」

アトラスの顔がぱつと明るくなる。

その様子を見て、エヴァリーンもフォレスト公爵夫人も思わず微笑んだ。

「さあ、せっかくの料理が冷める。最後までゆっくり食べていきたまえ」

張り詰めていた晚餐の空気は、再び穏やかなものへと戻っていった。

◇

翌朝。

アトラスは新しい眼鏡を掛け、両腕いっぱい借りた本を抱えてショウイン侯爵家の門をくぐった。昨日まで霞んでいた世界が、嘘のようにくつきりと映る。

石畳の模様も、壁を這う蔦の葉脈までもが見えて、思わず足を止めてしまう。

(……本当に、よく見える……)

胸の奥に、まだ慣れぬ高揚感を抱えながら玄関へ向かうと――

「アトラス！」

声と同時に飛び出してきたのはハイノスだった。

髪は乱れ、目の下にはうつすらと隈くまが浮かんでいた。

「お前、一体なにをしかしたんだ！ 公爵家から迎えが来るなんて前代未聞だぞ！ しかも泊まりまで……！」

「え？ ああ……昨日のことですか」

アトラスは首をかしげ、眼鏡をちよんと直すと真顔で言った。

「……兄上のお顔を、こんなにはつきり見たのは初めてです。初めまして」

「はあ!? 今さら何を言っているんだ！」

「いや、その……僕、目が悪かったらしくて。昨日、眼鏡を作っていたんです」

アトラスは照れ隠しのように頭をかいた。

「いやあ、なんだか、不思議な日でした」

「不思議で済ませるな！ とにかく最初から説明するんだ！」

ハイノスは半ば悲鳴のように叫び、アトラスを玄関脇の応接コーナーに引っ張っていく。

そこへ、ひょっこりと現れたのはガイアスだった。スラリとした体たいくに似合わず緩んだ笑みを浮かべたまま、ソファへどっかり腰を下ろす。

「ぶふふふっ！ アトラス！ 聞いたぞ。お前、創立記念パーティの三・文・芝・居をぶち壊したらしい

な？」

「三文芝居ですか？ ああ、あのルーリー嬢の不思議な芝居のことですね」

「ルーリー嬢!?」

ハイノスの顔色が一段と悪くなる。

「……あのシスタン殿下のお気に入りなの？ それをどうしたって!？」

アトラスは、創立記念日の出来事を思い出すように、すべてを語った。

「お、お前……そんな大事なことをなぜ黙っていた!?」

「だって……本当のことだし。誤解が解ければ、それでいいのになって」

「お前なああっ！」

また怒鳴り出しそうなハイノスをよそに、ガイアスは面白そうに身を乗り出した。

「で、公爵様はなんと？」

「えーとですね……」

アトラスが公爵の言葉を記憶通りにすらすると再現すると、ハイノスは頭を抱えて震え、ガイアスは腹を抱えて大笑いした。

「わっははは！ 見たかったぞ、その場を！ アトラス、よくやった！」

「よくやったじゃない！ やっちゃいけないんだ！」

ハイノスの悲鳴が屋敷に響き渡る。その騒ぎに、軽やかな足音でショウイン侯爵家夫人――アトラス達三兄弟の母であるカトリーヌが現れた。

「もう、朝からうるさいわねえ。何をエントランスで騒いでいるの？」

どこか楽しげな声色で、にこにここと笑みを浮かべる。

「あら、アトラス。……まあ、あなた眼鏡を掛けていたの？ 目が悪かったの？」

「はい。僕も昨日、知ったのですが」

「まあ、気づかなかったわ。言えよよかったのに。……そう、見えるようになったのね」

「なら、もつと色々見えちゃうかもしれないわねえ。耳がいいのは知ってたけど……なるほど、目が悪かったのね」

「……珍しいな、家族で集まっているのか」

低い声と共に現れたのは、ショウイン侯爵家の当主であり、シリウス国財務大臣、リカルドだった。厳格な顔立ちに落ち着いた風格を漂わせ、ゆったりと歩み寄る。

「我が家はあまり人が揃わぬからな。そうだ、今から少し茶でも飲むか」

「父上！」

ハイノスが慌てて進み出る。

「のんびりお茶を飲んでいる場合じゃないですよ！ アトラスが昨日——」

矢継ぎ早に事の顛末を語り出すハイノス。リカルドの顔は話を聞くうちにどんどん険しくなり、反対にカトリーヌの顔はどんどん楽しげになっていった。

（父上と母上は、こんなに表情豊かだったのか。ハイノス兄上も、ガイアス兄上も……）

アトラスは、今まで何度も見えていたはずの家族の顔を、はじめてみるような心持ちで眺めながら、ハイノスの説明を聞いていた。そして。

「アトラス！ なぜ私に報告しなかった！」

「いや、特に問題はないかと……」

「問題はあるっ！」

リカルドの声が大広間に響いた。

「ほら見る、アトラス！ やはり父上も私と同じ意見だ！」

ハイノスが力説したその時。カトリーヌが小首をかしげ、にっこり笑った。

「……あら、どうして？」

「は？」

リカルドとハイノスが同時に固まる。

「だって、あの殿下がボンクラって本当でしょう？ それをアトラスが暴いたんでしょ？ なんの問題があるの？」

「いや、そういうことではなく……」

「アトラス。あなた、なかなかやるわねえ」

カトリーヌは嬉しそうに息子を褒める。

「そうだぞ、アトラス！ よくやった！」

笑いすぎて涙目のガイアスも力強く頷いた。

父と次兄は深刻に眉をひそめ、母と長兄は楽しそうに笑っている。

そんな中、アトラスは眼鏡を押し上げながら思い出したように口を開いた。

「あ、この眼鏡もフォレスト公爵家で作っていたんだね」

「まあ、そうだったの？ きちんとお礼をしないといけないわね」

「似合っているぞ、アトラス！」

カトリーヌとガイアスは満足そうに頷く。

「なんであなた方は、そんなに呑気なんですか！」

ハイノスが胃のあたりを押さえながら悲鳴を上げた。

「それとですね……」

アトラスは少し首を傾げた。

「実は、公爵閣下から一つ依頼を受けました。『必ず父上に相談してから返事をするように』と言われています」

その一言で、部屋の空気が変わった。

リカルドは表情を引き締め、静かに問いかける。

「……依頼とは何だ」

「実は——」

アトラスはフォレスト公爵から頼まれたことを、会話も含め、一言一句違えず語り始めた。すべてを聞き終えた頃には、家族全員の表情から笑みは消えていた。

「……ユীগラス家、ですか」

最初に口を開いたのはハイノスだった。ハイノスは、リカルドと共に財務省で働いている。

「実は最近、財務省でもその名が挙がっている。領地からの財務申告に不自然な点がある、と報告を受けている。……婚約破棄となった令嬢とはいえ、友人に手紙の一つも返さないというのは不自然だ。もしかしたら、何かあるかもしれない」

リカルドは腕を組み、しばらく黙って考え込んだ。

やがて小さく頷く。

「よし、アトラス。公爵閣下からのご依頼はお受けしよう。元より、お前の記録によってご令嬢方を救えるというならば、断る理由はない。しかも財務省としても無関係とは思えぬ案件だ」

「では、父上。今日、公爵様へお返事をお伝えしておきます」

アトラスがそう言うと、リカルドは首を横に振った。

「いや、それでは失礼にあたる。正式な依頼なのだ。こちらから出向くべきだろう」

「そうですね。公爵様も『今日は一日、屋敷にいる』と仰っていました」

「ならば好都合だ」

リカルドは執事へ視線を向ける。

「フォレスト公爵家へ先触れを出せ。侯爵家より伺うと伝えてくれ」

「かしこまりました」

執事が一礼して足早に部屋を出ていく。カトリーヌは嬉しそうに手を合わせた。

「まあ。公爵家へまた伺うのね」

ガイアスは腕を組みながら笑う。

「今度は俺も一緒に行きたいくらいだ」

「兄上は仕事でしょう」

ハイノスが呆れたように返すと、リカルドはゆっくり立ち上がった。

「では行こう。フォレスト公爵家との共同調査、その第一歩だ」

アトラスは眼鏡をそっと押し上げ、小さく頷く。

こうしてショウイン侯爵家は、改めてフォレスト公爵家へ向かうこととなった。

◇

フォレスト公爵家の応接室。

重厚な扉が閉じられると、室内には静かな緊張が満ちた。長椅子にはリカルドとアトラス。少し離れてハイノスが姿勢よく腰掛けている。向かいにはフォレスト公爵とエヴァリーンがいる。

アトラスは膝の上に置いた鞆へ、そっと手を添えた。

昨日はあれほど慌ただしかったのに、今日は父と兄まで揃って、公爵家の応接室に座っている。自分のノートの話をするために。そう考えると、急に落ち着かない気持ちになった。

社交の場らしい穏やかな挨拶が交わされ、茶が運ばれる。

やがて、カップが静かに置かれる音だけが残ると、フォレスト公爵がゆっくりと口を開いた。

「本日はお越しいただき、感謝する」

リカルドは静かに一礼する。

「こちらこそ、お招きいただきありがとうございます」

フォレスト公爵は穏やかな表情で続けた。

「昨夜、アトラス君本人には礼を伝えた。今日は父君にもお礼を申し上げます。ご子息のおかげで、娘は救われた」

リカルドは静かに頷く。

「息子がお役に立てたのであれば、父として嬉しく思います」

短く礼を交わすと、リカルドが表情を引き締めた。

「……実は、本日は私からもお話ししたいことがあります」

「ほう？」

「我々財務省では以前から、ユーグラス伯爵領を内債対象としておりました」
フォレスト公爵の表情が変わる。

「ユーグラス家を？」

「はい。領地規模と税収が一致しておりません。さらに、ここ数か月、帳簿上では説明のつかない資金の流入も確認されています」

リカルドは淡々と続け、ハイノスも補足するために口を開いた。

立ち読みサンプルはここまで

「現時点では違法と断定できる証拠はありません。しかし、このまま放置できる内容でもありません。財務省として、内々に調査を始める予定でした」

アトラスは黙って二人の話を聞いていた。

昨日まで、自分が知っていたのは学園で耳にした話だけだった。

サリーナの名前。婚約破談。ルーリーの言葉。

それが今、父と兄の話によって、領地の税收や不審な資金の流れにまで繋がるうとしている。

自分が書き留めていたものが、思っていたよりずっと大きな話の一部なのかもしれない。

そう思うと、膝の上の鞆が妙に重く感じられた。

リカルドはアトラスのノートへ視線を落とした。

「そこへ、公爵閣下からサリーナ嬢のお話を伺い、その不自然さに違和感を抱きました。もしサリーナ嬢の件と、我々が追っている資金の流れが結び付くなら——何かあるに違いません」

応接室に短い沈黙が落ちる。

やがてフォレスト公爵がゆつくりと頷き、口元にわずかな笑みを浮かべた。

「なるほど……。こちらはサリーナ嬢のために動こうとしていた。そちらは財務省としてユーグラス伯爵領を調査しようとしていた。別々に進んでいた話が、ここで一本に繋がったというわけか。……面白い。確かにこれは、大事になる予感がするな」

アトラスは、そこでようやく自分の番が来たのだと気づいた。少し緊張しながら鞆を開く。

昨夜から何度頭の中で順番を確認してきた。どこから見れば、一番分かりやすいか。それだ

けは、きちんと準備してきたつもりだった。

数冊のノートを机の上へ丁寧に並べる。どのノートにも、小さな付箋ふせんが貼られていた。

「ご依頼に関係すると思われる箇所です」

フォレスト公爵が目を見開く。

「……もう整理してきたのか」

アトラスは一冊目を開いた。

「こちらが、サリーナ・ユーグラス様のお名前が最初に出てくる箇所です」

続いて二冊目。

「こちらが婚約破談に関する記録です」

さらに三冊目を開く。

「こちらが既にお渡ししていた、創立記念パーティへ繋がる部分になります」

フォレスト公爵は思わずノートから顔を上げた。

「……ちよつと待て。今朝、君は一度ショウイン侯爵家へ戻ったのだらう？ 家族へ事情を説明し、そのあと再びこちらへ来た。この短時間で、これだけのノートをすべて読み返したというのか？」

アトラスは首を横に振る。

「いいえ。書いたものは、大抵覚えていきますので」

応接室が静まり返る。

アトラスは少し照れたように笑った。